

コーム・マディーナト・グラーブの墓地に関する一考察

和田浩一郎

Some Remarks on the New Kingdom Cemeteries at Kom Medinet Ghurab, Egypt

Koichiro WADA

本稿は、エジプト・ファイユム地方に位置する、コーム・マディーナト・グラーブ遺跡における個人間の社会経済的差異を、埋葬資料の考察を通して明らかにすることを第一の目的としている。当該遺跡は王の「ハレム」を中心とした都市遺跡であり、居住域と墓地の両方から豊富な考古資料が出土していることから、新王国時代の社会研究に適した数少ない遺跡のひとつとされている。

被葬者の社会経済的差異を検討するに当たって、本稿では墳墓形態、副葬品の種類とコストに基づく分析を行った。コストについては、ディール・アル＝マディーナにおいて物品の価値基準となっていた「デベン」を用いた。ただし「デベン」による価値基準にはいくつかの課題が残されており、それらについても確認することとした。分析の結果、墓地内における墳墓形態の空間分布は、社会階層による住み分けがある程度行われていたことを示した。副葬品のコストと組成からは上下二つのグループが抽出されたが、その境界はそれほど明瞭ではなく、アル＝アマールナの住居の分析から推測されている、富者と貧者の断絶が想像するほど顕著ではない状況と類似した様相を示した。また上位グループの副葬品の組成は、テーベの事例研究では中間層に位置するものの、被葬者の称号はそれよりも上位の階層を示し、テーベとグラーブの社会そのものに差異が存在することが窺われた。グラーブの埋葬資料の分析を通して、価値基準としてのデベンの汎用性はある程度確認された。しかし物品の価値決定にはまだ課題が残されており、デベンは墳墓形態や副葬品の組成など、他の検証事項と共に用いることではじめて分析の有効な手段に成り得ると考えられる。

キーワード：エジプト新王国時代、コーム・マディーナト・グラーブ、埋葬の考古学、社会経済的差違、デベン

This paper aims to reveal the socio-economic differentiation of individuals in the New Kingdom cemeteries at Kom Medinet Ghurab. Kom Medinet Ghurab is located at the southeastern end of the Fayum region, and it has been identified as the 'royal harim in mr-wr' occupied from the mid-eighteenth dynasty until at least the reign of Ramesses V (the mid-twentieth dynasty). Since it is one of the better-preserved town sites, Kom Medinet Ghurab has provided considerable materials for the study of social archaeology in New Kingdom Egypt. In considering the socio-economic differentiation in cemeteries, analysis was based on types of tomb structure and the variety and value of funerary equipments. The value of goods was calculated using the deben. The deben seems to have been used as the price of things in the New Kingdom. However the deben was recognized to be useful as a wealth index and we shall take some problems into consideration. Especially, since materials about the deben system were found from Deir el-Medina, we do not know whether the deben functioned in Egyptian society as a whole or not. Data from Kom Medinet Ghurab provide a suitable example to discuss the validity of the deben outside the Theban region.

The result of the analysis and the distribution of tombs seem to indicate the existence of separate zones for social status to some degree. As for the variety and value of funerary goods, individuals were divided in two groups. The wealthy group seemed to belong to the 'Mid Status' interpreted from a study by Stewart Tyson Smith about the burial system in the seventeenth and eighteenth dynasties at Thebes. On the other hand, some members of the wealthy group were seemed belong to 'High-Mid Status', for they held important titles of the provincial government. The poorer group indicated to multiplicity of burial types and funerary goods. The division of the two groups in cemeteries at Kom Madinat Ghurab, as compared with settlements at el-Amarna, seemed to be comparatively clear.

Despite the lack of high status tombs in the data, we can not conclude that few high officials built their tombs

at Kom Medinet Ghurab since many looted tombs were excluded from the excavations reports. Through the analysis of the data, the deben was accepted as a wealth index in the New Kingdom. However, we need to use the denen with other elements such as tomb structure and funerary assemblage.

Key-words : New Kingdom Egypt, Kom Medinet Ghurab, funerary archaeology, socio-economic differentiation, deben

はじめに

古代エジプトの埋葬資料は、死と埋葬に関する豊富な文字資料の裏付けによって、被葬者を取り巻く社会状況をある程度反映したものであると考えられている。例えば第1中間期(2170-2025B.C.)¹⁾の中部エジプトの埋葬資料では、被葬者に経済的余裕がある場合には、埋葬行為にもそれが反映しているという状況が知られている(Kemp 1989: 239)。被葬者の資力が埋葬資料の差異となって表れるという、こうした資料状況に立脚して、古代エジプト各時代の社会状況を明らかにしようという試みが行われている。特に国家形成期における社会構造の変化を捉えようとする研究においては、集落遺跡の資料が十分ではない状況の中で、埋葬資料が重要な役割を果たしている。また近年では、統

一王朝形成後の時期においても同様の研究が行われるようになってきており、中でも第1中間期と中王国時代(2119-1794B.C.)初期における中部エジプトの社会状況を、複数の墓地遺跡を用いて検討したS.J. ザイドルマイヤー(Seidlmayer 1990)や、自らが発掘を行った中王国時代のアビュドスの墓地を用いて、中央政府の厳格な規定に縛られない、多様な「中級の」階層が存在することを明らかにしたJ.E. リチャーズ(Richards 1992)の研究が注目される。

本稿もこれらの先行研究と同様、埋葬資料から被葬者の社会経済的な側面を明らかにし、彼らが属していた社会の有り様について示唆を得ることを目的としている。そのため本稿では、近年、新王国時代(1550-1070B.C.)の埋葬

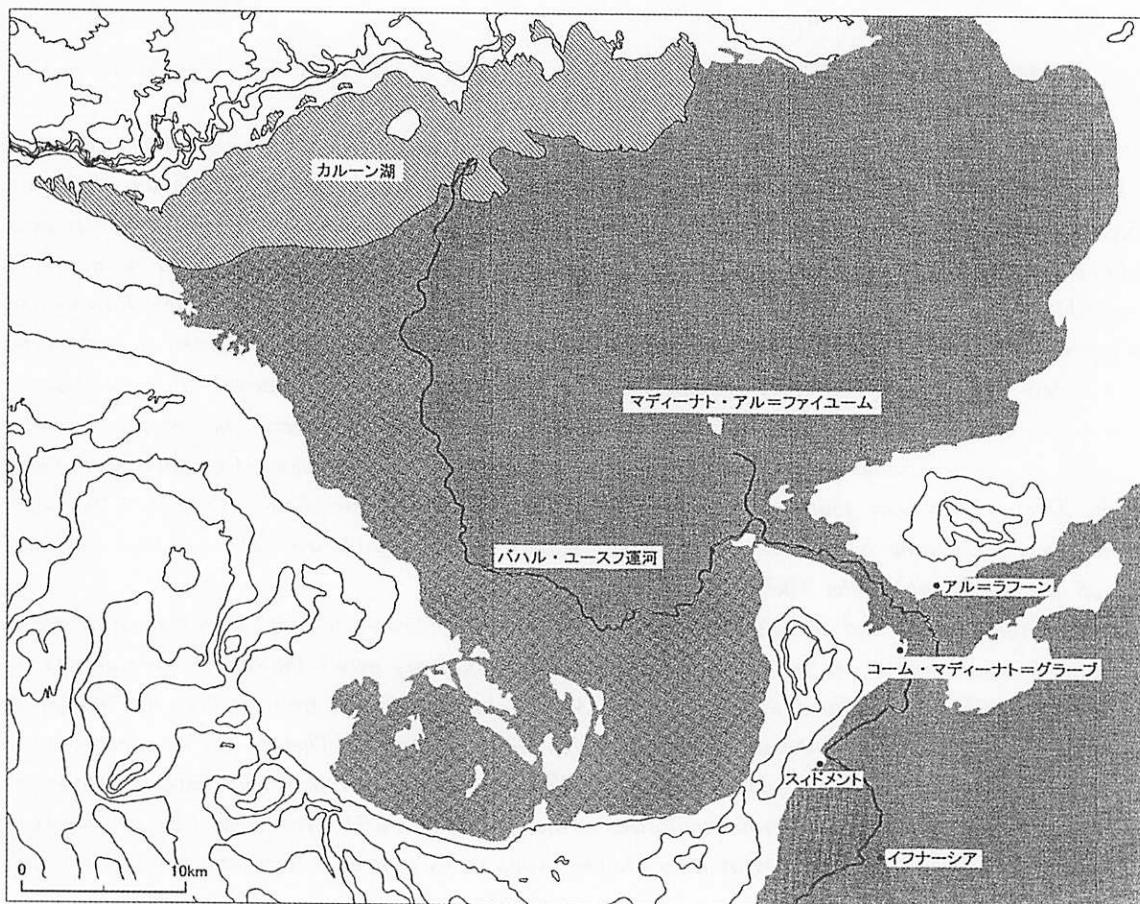


図1 ファイユーム地方

資料研究に導入されるようになった「デベン (dbn)」による価値基準を用いることとする。実際の分析を通して、この方法の有効性と問題点についても示唆が得られるであろう。

考察の対象として、本稿ではコーム・マディーナト・グラーブ (Kom Madinat Ghurab) 遺跡を取り上げることにした。この遺跡は19世紀末から20世紀初頭に調査が行われ、居住域とそれに隣接する墓地の様子がかなり明瞭となっている、新王国時代でも稀な遺跡として知られている。まずこの遺跡の概要を紹介し、墓地に埋葬された人々の社会背景を大まかに把握した上で考察を進めてみたい。

コーム・マディーナト・グラーブ遺跡の概要

コーム・マディーナト・グラーブ (以後グラーブと略記) は、エジプト・アラブ共和国の首都カイロから約100km 南の西部砂漠に位置する、ファイユーム地方 (図1) の入口に建設された都市遺跡である。ファイユーム地方は、リビア砂漠に形成されたカルーン湖南部に広がる緑地帯であり、土地の開墾が行われた中王国時代・第12王朝(1976-1794 B.C.) から現在に至るまで、上エジプト北部で最も豊かな穀倉地帯として知られている。また現在よりも大きく広がっていた湖周辺の沼沢地帯は、漁場としてだけでなく王族や高官が水鳥狩りや舟遊びを楽しむ場も提供していた。

盆地を形成するファイユーム地方は、低位砂漠によってナイル川流域の沖積地とは分断されている。両地域はバハル・ユースフ運河によって接続されており、運河の北部と南部では低位砂漠が半島状の地形を成している。グラーブはこのうち南部の低位砂漠の突端部に位置している。一方北部の低位砂漠には、第12王朝の王センウセレト2世のピラミッド (アル=ラフーンのピラミッド) と、その建設作業に従事した役人や工人達の居住した町 (カフーン) が建設されており、グラーブはバハル・ユースフ運河の対岸に、アル=ラフーンのピラミッドを望む立地にあったことになる。グラーブは王朝期にはメルウル (*mr-wr*) あるいはミウル (*mi-wr*) という名で呼ばれていた²⁾。この名称は本来「大きな運河」を意味しており、バハル・ユースフ運河を指していたものと思われる。なおギリシア・ローマ時代(332 B.C.-A.D.395) には、カルーン湖がこの名称から転じたモエリスの名で呼ばれていたことが知られている (Gardiner and Bell 1943)。

グラーブには初期王朝時代 (3032-2853B.C.) から中王国時代に比定される墳墓群の造営も認められ (Brunton and Engelbach 1927: 5-8)、王朝期のかなり早い時期から集落が形成されていた可能性があるものの、その痕跡は確認されていない。この遺跡でもっとも古い居住遺構は、G. ブラントン (Brunton) と R. エンゲルバッハ (Engelbach) が

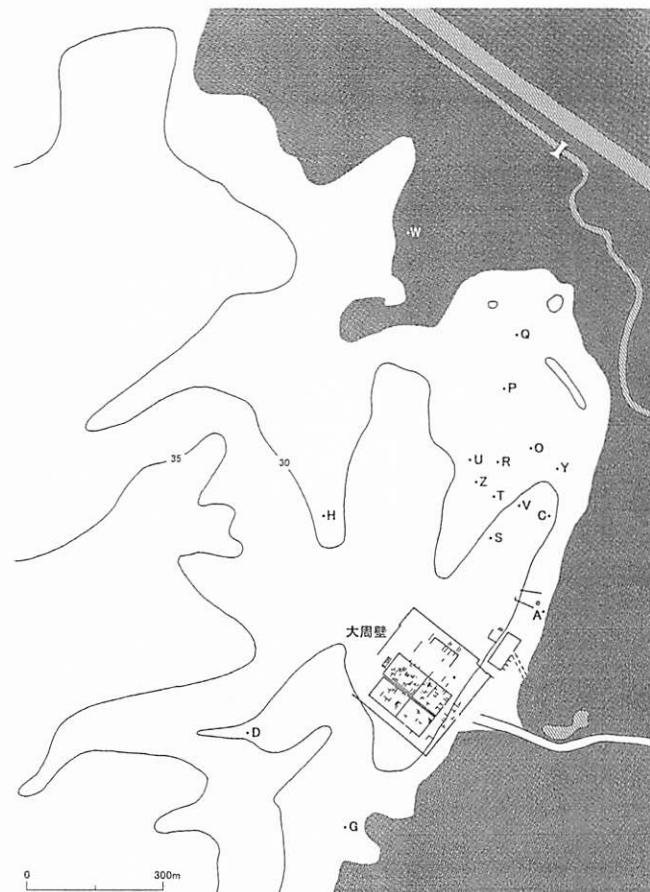


図2 コーム・マディーナト・グラーブ遺跡

古王国時代・第4王朝 (2639-2504B.C.) に比定している遺構である (Brunton and Engelbach 1927: 4)。これは強固な日乾煉瓦の周壁を備えた小規模集落で、おそらく第1中間期まで存続した、要塞化した集落の特徴を示しているものと思われる。第12王朝にはファイユーム地方の開墾に伴って、この地域にも多くの入植者があったと思われるが、この時期の中心は明らかに北のアル=ラフーンにあり、グラーブに大規模な集落は形成されなかったようである。しかし新王国時代・第18王朝 (1550-1292B.C.) になると、アル=ラフーンが積極的に用いられた痕跡は認められなくなり、代わって南のグラーブが居住の中心となっていく変化が認められる。L. ロート (Loat) は遺跡の南域で、第18王朝初頭に年代付けられる小規模な集落を確認したと記述している (Thomas 1981: 4) が、この集落は未調査のままであり、ロートの年代決定が妥当であるかどうかは現在のところ不明である。

グラーブの遺跡を概観して最も特徴的な遺構は、南北に並んだ長方形の二つの周壁と、それらを取り囲むさらに大きな周壁である (図2)。大周壁を構成している日乾煉瓦にはトトメス3世の印影を帯びたものがあり、また北周壁内にはトトメス3世の治世30年以前に神殿が造営されていた

ようである (Thomas 1981: 7)。そのため大周壁内の施設は、トトメス3世治世下に建設されたものと考えられている³⁾。この施設は、文字資料からその存在が知られている「メルウルのハレム⁴⁾」に同定されている (Kemp 1978; Thomas 1981; Bell 1991; Lacovara 1997)。現存する文字資料によって、明瞭に「メルウルのハレム」の存在が知られるのは第19王朝 (1292-1186B.C.) 以降であるが、ファイユーム地方に「ハレム」が存在していたことを示唆する資料は、第18王朝初頭まで遡ることができる⁵⁾。また中王国時代にはアル＝ラフーンに「ハレム」が存在していた可能性があり (Reiser 1972: 24)、この地域には伝統的に王家の居所が建設される素地があったようである。従ってグラーブの中心的な施設として、当初から「ハレム」が存在していた可能性は十分に考えられる。町あるいは施設としてのグラーブの記録は、第20王朝のウィルボー・パピルスを最後に認められなくなる。この行政記録は、ラメセス5世の治世下まではメルウルの「ハレム」が存続していたことを明確に示しているが、新王国時代末期の王権の衰退に伴って、「ハレム」を中心とした町の機能が低下していったことは想像に難くない。

このような遺跡の性格から、大周壁周辺に形成された墓地は、「ハレム」とその所領の維持管理に従事していた人々によって、主に利用されていたと考えられる。またトトメス3世からラメセス5世までのおよそ300年間という遺跡の存続期間は、新王国時代の3分の2の期間を占めており、新王国時代における墓地の動向を検討する対象として、適当な背景を持った遺跡といえるであろう。

グラーブの墓地

グラーブの墓地における発掘調査は、ピートリ (Petrie 1890, 1891)、ロート (Loat 1904)、プラントンとエンゲルバッハ (Brunton and Engelbach 1927) らによって実施された。ピートリは9基の墳墓について簡単な報告を行っており、本稿でもこのうち4基を考察の対象としている。一方ロートの報告は、墳墓に関する情報がほとんど欠落しているため、個別の墳墓の考察は不可能であった。本稿で取り扱う墳墓の大半は、プラントンとエンゲルバッハの報告に依拠している。プラントンとエンゲルバッハは墓地の全面的な調査を行い、21基の未盗掘墓を含む315基の墳墓リスト⁶⁾と主要な出土遺物の図版を報告書に掲載している。彼らは出土遺物の傾向から、未盗掘墓の多くを第18王朝前～中期に年代付けている (Brunton and Engelbach 1927: 10-16)が、その一部については近年再考察が行われており、第19王朝から第20王朝にかけての埋葬痕跡が明らかにされている (Bell 1985; Aston 1997)。

グラーブの墓地は大周壁の周辺に広範囲にわたって形成

されているが、プラントンとエンゲルバッハが測量点として用いた、図2のアルファベットを振ったポイント周辺に特に密な分布が認められる。また大周壁西側の高台にも多くのシャフト墓が分布しているものの、これらは徹底的な盗掘の被害を被っていたため、プラントンとエンゲルバッハの調査対象から除外されている。なお本稿で墓地内の各地点を記述する際には、プラントンとエンゲルバッハの測量点名を冠した、W墓地、D墓地といった名称を用いることとする。

グラーブに造営された墳墓形態は、単純埋葬⁷⁾、ピット墓、シャフト墓⁸⁾、スロープ墓⁹⁾、平地墓¹⁰⁾の5つに大別することができる。墳墓形態の墓地内の分布は、大周壁に近い場所には単純埋葬やピット墓といった簡易的な墳墓が多く、遠い場所により手の込んだ墳墓が多く分布するという傾向が認められ、墓地がある程度使い分けられていた可能性がある¹¹⁾。

考察の方法

冒頭に述べたように、本稿では被葬者の社会経済的な様相を検討する手段として、デベンという値を価値基準として用いる。具体的な方法は、J.J. ヤンセン (Janssen) によって集成された、新王国時代後期のテーベ西岸における物品の価値の記録 (Janssen 1975) を、副葬品に応用するというものである。これはL. メスケル (Meskell) がディール・アル＝マディーナの社会研究を行う際に導入した方法で (Meskell 1999: 176-215)、副葬品となった物品の価値をデベンに換算して、各墳墓の副葬品のコストを比較検討するものである。

デベンは元来、銅の重量を示す単位で、1デベンは約91gである。少なくともディール・アル＝マディーナでは、デベンで表した数値と等価となるだけの物品を揃えて交換を行うというシステムが確立していたらしく、デベンが擬似貨幣的な役割を果たしていたと見なされている (Kemp 1989: 248-250)。このような交換システムの値をディール・アル＝マディーナ以外の資料に用いるためには、まずデベンによる交換システムそのものとディール・アル＝マディーナの価値基準が、一般的な古代エジプト社会においても機能していたのか、という問題が解決されなければならないであろう。しかしながら、現存する個人の経済活動に関する記録は、ディール・アル＝マディーナ出土のものが圧倒的多数を占めており、他地域の体系的な検証は極めて困難である。そのため現時点ではデベンを用いた考察を行うためには、ディール・アル＝マディーナの工人達の経済観や村における「貨幣」の役割、さらには物品の価値変動といった現象が、少なくとも新王国時代の間は他地域と大差なかったという推測 (Janssen 1975: 539) の下で分析を行

うことになる。本稿ではグラーブの埋葬資料を対象とした分析を進めるが、これはディール・アル＝マディーナから遠く離れた遺跡において、デベンによる価値基準が有効に機能するかどうかを検証する意味でも、適切な選択肢であると言えよう。

デベンを用いるに当たっては、別の問題点も挙げられる。それは文字資料に認められる、物品の価値のばらつきである。価値のばらつきは、主として製作に起因していることが窺われる。すなわち物品の大きさ、製作の手間、原材料の価値といった要素による価値幅である。またそれに加えて、時期ごとの価値差も想定できるであろう。ただし実際の文字資料はその大部分が第20王朝に記録されたものであり、新王国時代を通して価値の変動が存在していたとしても、それを把握できるほどの資料状況はないというのが実状である¹²⁾。そもそも個人間の交換に用いられていたデベン値は、ある程度社会的な基準があったにしろ、常に不安定な要素を含んでいたことは想像に難くない。

このようにデベンによる物品の価値設定にはまだ多くの課題があり、その応用にはかなり注意を払う必要がある。それでも一定の価値基準としてのデベン値は、墳墓間の相対的な差違を検討するための目安として、十分な役割を果たすものと見なされている。デベン値の有利な点は、例えばリチャーズが用いた原材料の入手の困難さなどを数値化した価値基準 (Richards 1997: 37-38) と比べると、分析対象に極めて近い時代に記録されたエジプト人自身の基準で、多様な物品の価値が把握できることにある。

分析に用いるデベン値は、原則的にメスケルの設定に準拠することにする。これはメスケルの設定が、第18王朝の事例までを視野に入れたものだからである。グラーブの出土遺物の中で、メスケルの論考に取り上げられていない物品については、ヤンセンの研究から引用することにした。物品のデベン値にばらつきがある場合、提示されている資料の中でできるだけ年代の古いものを採用するか、あるいは材質等の特徴が最も近いと思われるものを用いることで、出土遺物との乖離ができるだけ小さくするように努めた。以下いくつかの墳墓の内容について特筆すべき点を述べ、その上で全体の傾向について得られた知見を述べてみたい。なお副葬品のデベン値算出は、対象となる墳墓の保存状態が良好であることが前提となるため、分析は原則的に未盗掘墓を取り扱うこととした。

各墳墓の詳細（表1、2）

W墓地の5号墓は大型のシャフト墓で、グラーブで唯一、石棺埋葬が認められた墳墓である。この石棺が安置されていた墓室はすでに大規模な盗掘を受けており、土器など若干の遺物が出土しただけであった (Brunton and Engel-

bach 1927: 20)。だがこの墳墓には、正式に報告されていない別の墓室が存在していたことが、トーマスによる調査資料の見直しによって明らかにされている (Thomas 1981: 21)。この墓室はシャフトの途中に穿たれており、入口の封鎖壁に損傷がない状態で発見されたという。表1、2に示したのは、この未盗掘埋葬の内容である。この埋葬は女性のもので、副葬品の内容は本考察で取り扱う未盗掘墓の中で最も豊かである。木製チェストや木製シャブティ箱の副葬は、グラーブでは唯一の例である。トーマスは埋葬時期を第19王朝初期と推測し、アストンもこれを支持している (Aston 1997: 47)。この年代が正しいとすると、シャフト下の墓室で行われた石棺埋葬と時期的な隔たりは大きくないと考えられる¹³⁾。ただし木棺やシャブティといった副葬品からは、両者の関係を示唆する情報は得られておらず、この女性の名前や社会的地位も分かっていない。

7号墓は木棺埋葬が行われたピット墓のひとつである。埋葬時期を明らかにするような特徴的な副葬品は伴わないが、遺物の組成から第19王朝の埋葬と推測される。木棺の使用によって、この墳墓形態の中ではとりわけコストのかかった埋葬という結果を示した。この墳墓の被葬者も女性である。副葬品の中で注目されるのは、二つの土器にそれぞれ14体づつ木製シャブティが納められていたことである (Brunton and Engelbach 1927: 9)。このようなシャブティ容器¹⁴⁾は、木製シャブティ箱の代用品として採用されたものと考えられる。またシャブティは単体では安価な品であるが、数を揃えるためにはそれなりの費用が必要となることが分かる。

Q墓地の26、27号墓は、それぞれ女性3人、男性7人および小児2人の埋葬が認められたスロープ墓である (Brunton and Engelbach 1927: 9-10)。隣接した立地、副葬品や墳墓構造の類似性は、2基の墳墓がかなり近い時期に集中的に造営された、家族墓的性格を持つものであることを推測させる。両墳墓から出土しているキプロス系土器の形式から、埋葬は共に第18王朝中期から後期にかけてのものと推測される。26号墓の女性3人は箱形木棺に埋葬されていたと思われるが、木棺はほとんど原型を留めておらず詳細は不明である。27号墓では7人の男性と2人の小児が部屋の中央に横並びに安置されており、壁際に容器を主体とした副葬品が並べられていた。木棺や葦製マットなど、遺体を保護していた備品については報告されていないが、本来は何らかの保護が行われていたと考えられる。副葬品の配置には特に規則性は認められず、それぞれどの遺体に帰属するものであるかを判断するのは非常に困難である。ただし副葬品の個数は均等に割り振れるものではないので、被葬者間にある程度の差異があったことは明らかである。

表1 副葬品の内容 (Brunton and Engelbach 1927より作成)

5号墓 W墓地／シャフト墓 女性		27号墓 Q墓地／スロープ墓 男7／小2	
彩色木棺	40	指輪 3点	12
脚付木棺	10	スカラベ 11点	22
黒壇製小箱	3	ビーズ	1
青銅製ナイフ	3	輸入土器 2点	4
青銅製鏡	12	土器 17点	17
木製カスタネット	2	計	56
木製シャブティ箱	5	27号墓 Q墓地／スロープ墓 男7／小2	
木製シャブティ 13体	13	指輪 7点	28
アラバスター製ボウル	2	スカラベ 12点	24
ファイアンス製皿	1.5	ビーズ	1
輸入土器	2	青銅製鏡	12
土器 2点	2	アラバスター製ボウル	2
計	95.5	アラバスター製壺 4点	8
7号墓 D墓地／ピット墓 女性		石造コホル壺 7点	14
彩色木棺	40	輸入土器 6点	12
木製枕	5	土器 17点	17
指輪 4点	16	計	118
木製シャブティ 28体	28	203号墓 T墓地／準シャフト墓 女性	
土器 3点	3	指輪	4
計	92	土器 3点	3
計	7	203号墓 T墓地／単純埋葬 小児	
76号墓 T墓地／ピット墓 男性／小児		革製マット	1
スカラベ 2点	4	ファイアンス製スカラベ	2
ファイアンス製護符	1	土器	1
ビーズ	1	計	4
土器 5点	5	443号墓 S墓地／ピット墓 小児	
計	11	革製マット	1
82号墓 T墓地／ピット墓 女性		ファイアンス製スカラベ	2
スカラベ 2点	4	穀類の入った土器	2
土器	1	計	5
計	5	445号墓 S墓地／単純埋葬 女性	
224号墓 P墓地／ピット墓 男性		ファイアンス製指輪 2点	8
革製マット	1	紅玉隨製耳飾	2
石製スカラベ	2	土器 2点	2
土器	1	計	12
計	4	458号墓 T墓地／単純埋葬 男性	
245号墓 P墓地／単純埋葬 男性／女性		革製マット 2点	2
男性	5	ファイアンス製飾り板	2
ネックレス	1	ビーズ	1
ビーズ	1	土器	1
土器	7	計	6
計		605号墓 H墓地／シャフト墓 男性／女性	
98号墓 Q墓地／ピット墓 女性		男性	
指輪	4	彩色木棺	40
アラバスター製コホル壺	2	木製小箱 2点	6
土器	1	ネックレス	5
計	7	杖	1
26号墓 Q墓地／スロープ墓 女性3人		木製シャブティ	1
女性A		ファイアンス製シャブティ	1
木棺	20	スカラベ	2
アラバスター製コホル壺	2	護符 2点	2
ファイアンス製ボウル	2	彩色アンフォラ 5点	10
輸入土器	2	彩色土器	2
計	26	輸入土器	2
女性B		計	72
木棺	20	女性	
アラバスター製コホル壺	2	革製マット	1
計	22	ネックレス	5
女性C		プレスレット 2点	10
木棺	20	耳飾り 3組	6
計	20	計	22
共有?		258号墓 Z墓地／ピット墓 小児	
木棺	20	木棺	20
アラバスター製コホル壺	2	スカラベ	2
計	22	ビーズ	1
258号墓 Z墓地／ピット墓 小児		タカラガイ	1
木棺	20	大麦の壺	2
アラバスター製コホル壺	2	土器 2点	2
計	20	計	28
共有?			

表1 (つづき)

606号墓 H墓地／シャフト墓 男性	
彩色木棺	40
木製枕	5
杖	1
化粧道具箱	3
木製シャブティ 2点	2
土器	1
計	52

表2 副葬品の内容 (Petrie 1890より作成)

20号墓 シャフト墓 男性	
彩色木棺	40
心臓スカラベ	10
木製スプーン	2
シャブティ 2点	2
木製彫像	10
青銅製指輪	4
ネックレス	5
革製コホル壺	1
木製化粧棒	1
アラバスター製小型容器 2点	4
彩色土器 5点	10
土器 4点	4
計	93

21号墓 シャフト墓 男性2人	
エフェルメヌウ	
彩色木棺	40
木製シャブティ 5点	5
計	45
イウンエントゥレシュ	
彩色木棺	40
計	40
共有?	
木箱	10
木製金箔張りベクトラル	40
彩色土器 2点	4
土器 12点	12
計	66

22号墓 シャフト墓男性	
彩色木棺	40
木製彫像	10
青銅製指輪	4
木製枕	5
土器	1
計	60

23号墓 シャフト墓 男性	
彩色木棺	40
青銅製指輪	4
革製コホル壺	1
革製化粧棒	1
木製シャブティ	1
輸入土器	2
土器 2点	2
計	61

P墓地の245号墓には男性と女性の埋葬が認められた。ミケーネ系あぶみ壺の副葬から、第18王朝後期から第19王朝にかけての埋葬と推測される。この墳墓は日乾煉瓦を矩形に積み上げ、その上に木板で覆い屋根を架けるという工法を用いた、手の込んだピット墓である。男性と女性は頭位を逆にして折り重なった状態で埋葬されていた (Brunton and Engelbach 1927 : 14)。それぞれの被葬者に属する副葬品は、ヴァリエーションと数の両方で女性が上回っており、コストとして男性の倍以上のデベン値が算出される。また女性と小児の埋葬が行われていたW墓地の293号墓(ピット墓)では、両者の副葬品のヴァリエーションはほぼ等しく、数で女性が上回っているものの、小児の埋葬に木箱が用いられているために、コストとしてはほぼ等しかったと推測される。この2基の事例を見る限り、それほど豊かではない人々の埋葬においては、性差や年齢が副葬品に与えた影響は必ずしも明瞭でないと言うことができよう。同様の結果は、メスケルの考察によっても確認されている (Meskell 1999 : 211)。

H墓地の605号墓(シャフト墓)は、プラントンとエンゲルバッハが調査した未盗掘墓の中では、5号墓に次いで豊かな内容を持っている墳墓である。この墳墓の副葬品はベルによって再検討が行われており (Bell 1985)、他の墳墓よりも詳細な情報を得ることができる。605号墓からは男性と女性の埋葬が検出されている。男性は彩色木棺に埋葬されており、木棺内に副葬されたシャブティから、扇持ち (*f^b-hw*) の職にあった人物であることが分かる (Bell 1985 : 63)。木棺が黒色の下地に黄色の装飾を施したタイプであることから、埋葬は第18王朝末期から第19王朝初期に行われたものと考えられる (Bell 1985 : 64)。扇持ちは王や王族の傍らに控えて扇で風を送る役目を負っており、その社会的地位は決して低いものではなかったと推測される。男性の木棺の傍らには、女性のマット埋葬¹⁵⁾が安置されていた。副葬品が搅乱を受けていないことから、ベルはこの女性が木棺の男性と繋がりのある人物であったと推測している (Bell 1985 : 66)。女性の埋葬はマット埋葬の中では豊かな部類に入るものの、5号墓の女性とは異なり、副葬品の内容やコストにおいて男性との差は歴然としている。ディール・アル=マディーナの事例では、夫婦間の副葬品コストが4:1という大きな差を示す場合が確認されている (Meskell 1999 : 188) もの、その場合でも最低限の共通要素として木棺が使用されている。従って605号墓の男女を夫婦と仮定することは難しく、召使いなど男性とは社会的に異なる階層にあった人物と解釈するのが適切と思われる。なお両埋葬への副葬品の振り分けは、ベルの解釈に拠るものである。

ピートリが大周壁の北側で発掘したシャフト墓群は、報

告書の記述を見る限りでは盗掘の被害を被った状態で発見されたようである。だが各墳墓からは彩色木棺と共に多くの副葬品が出土しており、ある程度の検討には耐えられるとして判断されたため、参考という位置づけでコストの算出を行った。なおこれらのシャフト墓は、埋葬に用いられた木棺が黒地に黄色の装飾を施しているタイプであることから、605号墓同様、第18王朝末期から第19王朝初期に年代付けられている (Hall 1980: 29-30)。

20号墓と21号墓、ならびに22号墓と23号墓は、シャフト下に向かい合って掘削された二つの墓室を、それぞれ一基の墳墓と見なしたものである (Petrie 1890: 38-39)。20号墓からは男性一人の木棺埋葬が検出されており、心臓スカラベや木製彫像の出土が認められる。21号墓はファイユーム市長 (*h3ty-nt3-s*) ネフェルメヌウ (*nfr-mn.w*) とシェのハレムの代理人 (*idnw pr hnr.t m š*) イウンエントゥレシュ (*iwn-n-twrš*) の合葬墓であるが、木箱にはセンルという男性の名が、また本分析には計上していない木製シャプティにはタケミト (*t3-kmi.t*) という女性の名が記されている。とりわけタケミトのシャプティの存在は、本来より多くの被葬者が墓室を共有していたことを示唆するものであろう。ファイユーム市長とハレムの代理人という、グラーブの行政組織の要職にあった人物達がこのような埋葬方法を採っているのは、この墳墓が家族墓として使用されていたことを示していると考えられる。

以上、分析対象とする墳墓の内容について特徴的な点を述べた。個々に言及しなかった他の墳墓については、次節の中で触れていくことにする。

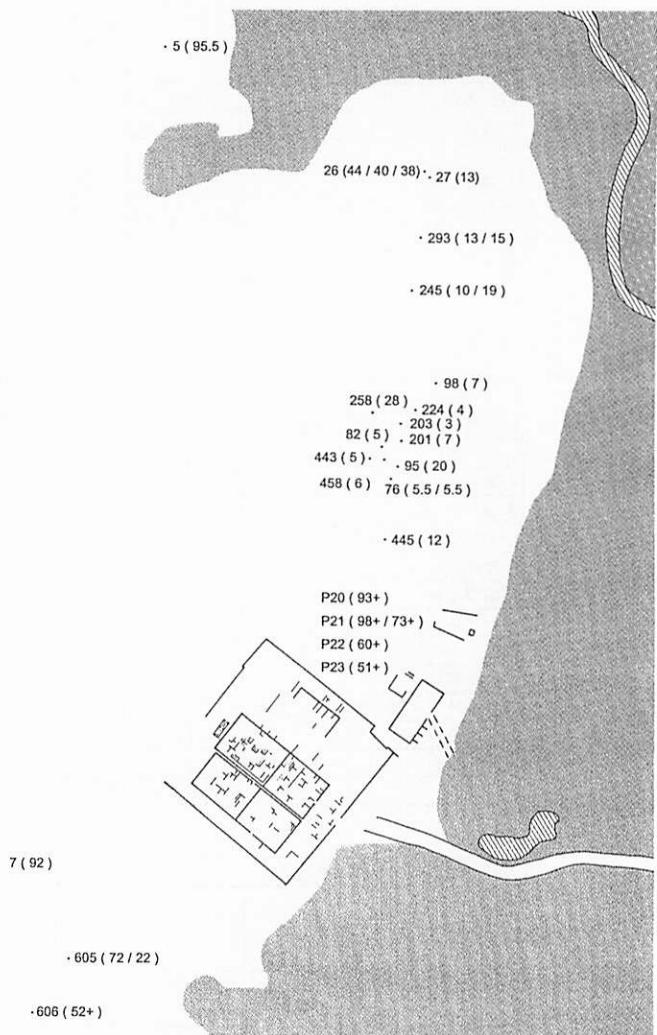


図3 分析対象とした墳墓の分布

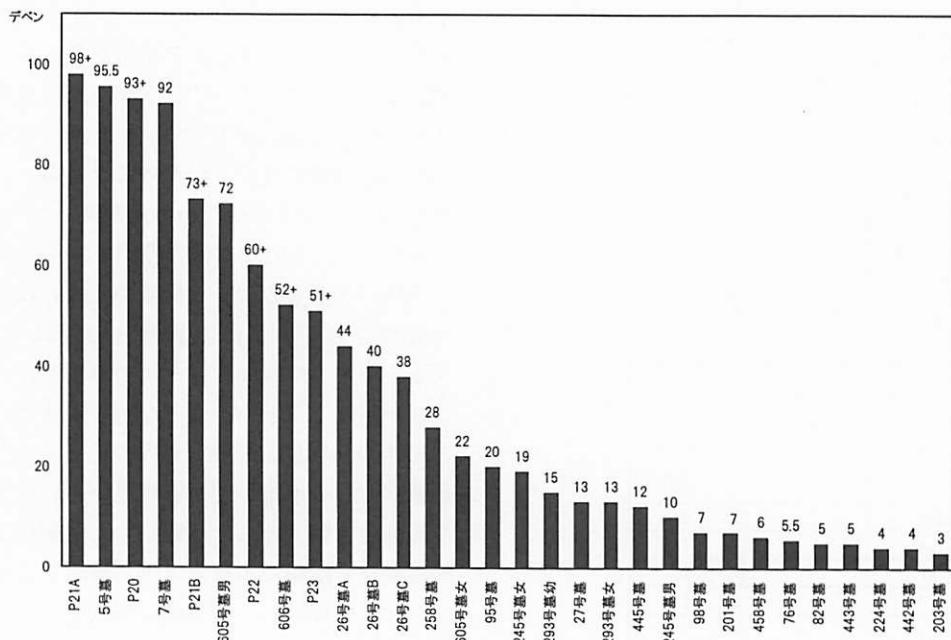


図4 被葬者ごとの副葬品コスト

分析結果の検討と解釈

図3は分析対象とした墳墓の分布であり、図4は各被葬者ごとの副葬品のコストをグラフ化したものである。また表3では副葬品を種類別に統合し、墳墓ごとにその有無をまとめてみた。複数の遺体が埋葬されている墳墓では、どの被葬者に帰属するのかが不明な副葬品が存在している。それらについては、デベン値を人数分で振り分ける形で便宜的な算出を行っている。なお27号墓のように小児が成人と混成で埋葬されている場合は、小児にも均等に振り分けることにした。いくつかの小児の単葬墓や、293号墓の女性と小児のように、時に小児の埋葬が成人を上回る場合が認められるため¹⁶⁾、年齢による格差を勘案することは困難であると考えたからである。

副葬品のコストから見ると、グラーブの墳墓群はなだらかな下降曲線を描くことが分かる(図4)。50デベンから100デベンの間は、7号墓を除いてシャフト墓の被葬者が占めている。ただしシャフト墓9基のうち6基は盗掘による影響があるため、50デベン以下の墳墓群とのコスト差はさらに明瞭であった可能性が高い。シャフト墓に続くのは26号墓(スロープ墓)の被葬者であり、これは墳墓形態の複雑さとも矛盾しない。26号墓の木棺は無彩色木棺と仮定したデベン値を充てているが、より高価な木棺であった可能性も考えられる。これらのことから勘案すると、グラーブの墳墓群はシャフト墓、スロープ墓を主体とする上位グループと、ピット墓と単純埋葬を主体とする下位グループという、二つのグループから成っていたと判断できるであろう。ただし下位グループ内でも墳墓ごとのコスト差は大きく、社会階層がそれほど高くない人々の間にも、かなりの資力差があったことが推測される。コストが20デベン前後の墳墓は、上位グループの副葬品から木製品や青銅製品を除いた内容と言えるが、10デベン以下になると埋葬の内容はほとんど画一的になり、遺体の保護以外には1~2点の装身具か護符だけが副葬されていたように思われる(表3)。グラーブの埋葬資料が示すこうした個人間の社会経済的様相は、B.J. ケンプ(Kemp)が第18王朝後期の王宮都市アルニアマールナの住居サイズの分布から推測した、富者と貧者の断絶が想像するほど顕著ではない社会(Kemp 1989: 298-300)に類似した傾向を示していると言えるであろう。

このように副葬品の分析は、墳墓形態と副葬品の豊かさの間に基本的な相関関係が存在することを示している。つまりシャフト墓やスロープ墓のように墳墓の構造が複雑で、造営そのものに大きな資力や労働力が投入されている場合、副葬品も価値の高いものが選択されているということである。しかし中には7号墓のように、シャフト墓に匹敵するほど豊かな副葬品を持つピット墓も存在している。シャフト墓の周辺やD墓地には、こうした豊かなピット墓

表3 被葬者ごとの副葬品組成

墳墓No.	区 地	墳 墓 形 態	木 棺	マ ット	木 箱	木 箱(小)	青 銅 製 鏡	化 粧 用 具	装 身 具	脚 像	シャ ブ テ イ	ベ グ ラ ル	心 臓 ス カ ラ ベ	護 符	石 製 器	石 製 容 器	ファ イ ア ン ス	デ ベ ン 値
P21A	大周壁北	シャフト墓	●	▲							●	▲					98+	
5	W	シャフト墓	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	95.5	
P20	大周壁北	シャフト墓	●			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	93+	
7	D	ピット墓	●		●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	92	
P21B	大周壁北	シャフト墓	●	▲								▲					73+	
605男	H	シャフト墓	●		●			●	●	●	●	●	●	●	●	●	72	
P22	大周壁北	シャフト墓	●		●	●	●	●	●	●	●						60+	
606	H	シャフト墓	●	●	●	●			●	●	●						52	
P23	大周壁北	シャフト墓	●				●		●	●	●						51+	
26A	Q	スロープ墓	●				▲					▲	●	●	●	●	44	
26B	Q	スロープ墓	●				▲					▲	●	●	●	●	40	
26C	Q	スロープ墓	●				▲					▲					38	
258	Z	ピット墓	●									●					28	
605女	H	シャフト墓	●					●	●	●							22	
95	T	準シャフト墓			●								●	●	●	●	20	
245女	P	単純埋葬					●						●	▲			19	
293幼	W	ピット墓	●										●	●			15	
27	Q	スロープ墓				▲	●						●	●			13	
293女	W	ピット墓											●	●			13	
445	S	単純埋葬					●										12	
245男	P	単純埋葬					●							▲			10	
98	O	ピット墓			●	●											7	
201	T	準シャフト墓			●	●											7	
458	T	単純埋葬	●										●				6	
76	T	ピット墓											●	●			5.5	
82	T	ピット墓											●	●			5	
443	Z	ピット墓	●										●	●			5	
224	R	ピット墓	●										●	●			4	
442	T	ピット墓	●										●	●			4	
203	T	単純埋葬	●										●	●			3	

▲:帰属不明の副葬品

が集中的に造営されていた可能性がある。特にシャフト墓周辺のピット墓に埋葬された人々は、シャフト墓の被葬者と主従や雇用の関係にあったことが推測される(Smith 1992: 219)。

二つのグループの副葬品を比較してみると、コストの中でとりわけ大きなウェイトを占めていたのは、木棺であることが分かる。また木製の家具類や青銅製品、シャブティの存在の有無がグループングの指標となるようと思われる。そこで、コスト算出には用いなかった墳墓も対象として、墓地全域における木棺とシャブティの分布を見てみたい。木棺の出土例は、コスト算出で取り上げた墳墓に2例が加わる。28号墓はD墓地のピット墓で、盗掘のために副葬品は発見されていない。613号墓はH墓地のシャフト墓で、こちらも盗掘の被害を被っていたものの、二つの墓室から青銅製鏡や杖、指輪、石製容器などが出土していることから(Brunton and Engelbach 1927: 17)、本来はかなり豊かな墳墓であったことが推測される。木棺に比べると、シャブティの出土例は多く、その分布は大周壁南西のD、H墓地と、北西のW墓地に集中していることが明瞭である(表4)。シャブティの副葬が認められた21基の墳墓の内訳は、平地墓2、シャフト墓・準シャフト墓9、ピット墓7、単純埋葬2、不明1となっている。シャブティの材質、形状は多様であるが、概ね第19王朝初期以降に比定されるものと考えられる。この結果が示すところは、単純埋葬へのシャブティの副葬は稀であるが、少なくとも第19王朝には

表4 シャブティが副葬された墳墓

墳墓No.	墓地	墳墓形態	シャブティ材質	収納用具
6	W	シャフト墓	ファイアンス製	
13	D	ピット墓	木製	土器
24	D	ピット墓	木製	
29	D	ピット墓	木製	バスケット
33	D	ピット墓	木製	
35	W	シャフト墓	土製	
36	W	平地墓	土製	
37	W	平地墓	土製・ファイアンス製	
41	R	ピット墓	木製	バスケット
242	R	ピット墓	土製	
243	R	ピット墓	土製	
257	Z	準シャフト墓	不明	
409	S	単純埋葬	木製・石灰岩製	
438	L	シャフト墓	土製・木製	
453	T	単純埋葬	不明	土器
473	W	シャフト墓	ファイアンス製	
474	W	シャフト墓	石灰岩製	
499	H	準シャフト墓	土製	
600	W	不明	土製・石灰岩製	
601	H	準シャフト墓	ファイアンス製	
605	H	シャフト墓	木製・ファイアンス製	

表5 テーベの副葬品に見られる社会階層差
(Smith1992: Table 18を改変)

	埋葬用品	日用品
全グループ共通	棺 装身具	箱、バスケット 化粧道具
+中間層 (Mid status)	シャブティ 彫像 花束、花輪 豊饒のシンボル(蒸焼きの女性像など) 護符、心臓スカラベ カノボス容器	職業上の道具 杖 サンダル 衣類 椅子 ベッド 食糧
+準エリート層 (High-mid status)	バビルス ゲーム ミイラマスク	石製・金属容器 リオン その他の家具
+エリート層	多重棺 ミイラ化された肉(王のみ) 特別な彫像(?) オシリス・ベッド(?)	多彩色ガラス器

どの墳墓形態でもシャブティの副葬が行われていたことがある。特にD墓地は、上位グループに含まれる7号墓のように、シャブティの副葬された豊かなピット墓が集中していた可能性が高い。

以上のような副葬品の分析からは、墳墓形態の分布にも窺われた、大周壁から離れた地区を占めるW墓地やQ墓地、H墓地の優位性が証明される結果が導き出された(図3)。さらにD墓地については、下位グループの中でも相対的に豊かな人々が埋葬されていたことがより明瞭となった。そして大周壁北東側の広大な墓地は、大部分が最も埋葬に資力をかけなかった人々の埋葬地として利用されていたことが確認された¹⁷⁾。

このようにグラーブの埋葬資料には、墓地内の住み分けが社会階層に基づいて比較的厳格に行われていたことが認められる一方で、副葬品に費やされた資力は、社会階層の差を比較的緩やかに示しているという傾向が認められた。

シャブティの副葬の普及が第19王朝以降に進んだことなど、埋葬習慣の変化によって埋葬のコストに序列が生じている可能性も否定はできないが、埋葬ごとの詳細な年代決定は困難であり、また比較的年代が明瞭な場合は第18王朝後期以降の例が多かったため、年代差による格差はそれほど大きなものではないと思われる。

グラーブと古代エジプト社会

前節の分析によって、グラーブに埋葬された人々は二つのグループを形成することが明らかとなった。それではグラーブの被葬者達は、古代エジプト社会の中にあってどのように位置づけられる人々なのであろうか。新王国時代における社会階層を、物質文化から考察した研究はいまだに乏しく、この問題を検討するための判断材料は必ずしも十分ではない。その中にあってS.T. スミス (Smith) によるテーベ西岸の未盗掘墓の副葬品研究 (Smith 1992) は、本稿の指標となる論考といえる。

スミスは第17王朝と第18王朝に年代づけられる、36基の未盗掘墓を分析の対象とし、それぞれの副葬品を埋葬用に製作されたもの、生前使用していたもの、供物に分類し、それらの物品が埋葬に際してどのように取捨選択されていたのかを検証した。その結果として、副葬品はエリート層、準エリート層、中間層という、被葬者の社会階層に応じた内容を持っていることが明らかとなった (Smith 1992: 217-220、表5)。スミスが提示したこの社会階層の区分は、D. オコナー (O'Conner) による行政機構の概観 (O'Conner 1983: 191-194) を基礎としている。スミスの区分は、オコナーが中間層¹⁸⁾に一括した階層を、準エリート層と中間層に細分している点に若干の独自性が認められる。

スミスの考察の結果をグラーブの副葬品の組成に当てはめてみると、資料の時期差が若干あるものの、ピートリ20号墓の心臓スカラベと木製彫像、H墓地605、606号墓のシャブティと杖の副葬から、グラーブの上位グループがテーベの中間層と概ね一致する内容を持っていると判断された。しかしその一方で、テーベでは標準的に見られる家具類が、グラーブではほとんど認められないという相違も認められ、テーベの副葬品の組成をグラーブの事例に適用することの妥当性を検証する必要が生じた。

この問題を検証するためには、グラーブの被葬者の社会的地位を別の資料から確認する必要がある。そこで彼らが帶びていた称号を取り上げてみたい。メルウルや「ハレム」に属する役人の名前と称号は、新王国時代を通して文字資料の中に現れる (Davies 1925; Gardiner 1948a; 1948b; Bryan 1990)。これらのうちの何人かはグラーブの墓地に

表6 グラーブの墓地出土の人名

名前	称号		時期	遺物（墳墓 No.）	文献
メンケベル	<i>mn-hpr</i>	神官長	<i>imy-r hm-ntr</i>	第19王朝 (R.II) ?	Gardiner 1948a: 35, 5
		メルウル市長	<i>h3ty-' n mr-wr</i>	ステラ (37号墓)	B & E: 11
		書記	<i>ss</i>	ステラ (37号墓)	
ネフェルメヌウ	<i>nfr-mn.w</i>	ファイユーム市長	<i>h3ty-' n t3-s</i>	第19王朝前半	木棺 (ビートリ21号墓) Petrie 1890: 36, 38
イビ	<i>lpj</i>	市長	<i>h3ty-</i>	第19王朝?	ステラ (608号墓) B & E: 19, pl.L, 6
イウンエントウレシュ	<i>lwn-n-twrs</i>	シェのハaremの代理人	<i>ldnw n pr lnr.t m s</i>	第19王朝前半	木棺 (ビートリ21号墓) Petrie 1890: 36, 38
ホリ	<i>hr.t</i>	メルウルのハaremの査察官	<i>rw3w n pr lnr.t m mr-wr</i>	第18王朝末-第19王朝前半	ピラミディオン R-P 1983: 32-33
ラメセス・ネブウヘン	<i>r'-m3-s-w-nb-wbn</i>	王の息子	<i>s3-nswt</i>	第19王朝 (R.II)	石棺 (5号墓) B & E: 19-24
センル	<i>snr</i>	王の家の書記／王の書記	<i>ss hwt-nswt / ss nswt</i>	第19王朝	木箱 (ビートリ21号墓) Petrie 1890: 36
バア...	<i>p3...</i>	扇持ち	<i>p3-hw</i>	第19王朝前半	シャブティ (605号墓) Bell 1985: 63
アメンエムオペト	<i>lmn-m-ip3.t</i>	アメン神殿の...	<i>... n hwt lm (?)</i>	第19王朝	木棺 (ビートリ22号墓) Petrie 1890: 38-39
ティイ	?	機織りの長	?	第18王朝 (A.III-A.IV)	木製彫像 Chassinat 1901
フイ	<i>hj</i>	糸つむぎの長 (?)	<i>tpy msn ?</i>	第19王朝	木製枕 (ビートリ22号墓) Petrie 1890: 36, 38
メリラー	<i>mr-r'</i>	牧牛長	<i>imy-r k3w</i>	第19王朝	シャブティ (D墓地?) Loat 1904: pl.V, 11
?	?	書記	<i>ss</i>	第18-19王朝	シャブティ (36号墓) B & E: 11, pl.XXI
メンケベル	<i>mn-hpr</i>	書記	<i>ss</i>	第19王朝?	化粧棒 (D墓地?) Loat 1904: pl.IV
マイア	<i>m'ls</i>	歌い手	<i>hs(t)</i>	第18王朝 (A.III-A.IV)	木製彫像 Chassinat 1901
タアケミト (?)	<i>t3-kml.t ?</i>	家の女主人	<i>nb.t-pr</i>	第19王朝	シャブティ (ビートリ21号墓) Petrie 1890: 38
ネベティ (?)	<i>nb.t.l ?</i>	-	-	第18王朝 (A.III-A.IV)	木製彫像 Chassinat 1901
トウティ	<i>twty</i>	-	-	第18王朝 (A.III-A.IV)	木製彫像 Chassinat 1901
ウルヌル	<i>wrn</i>	-	-	第19王朝	カノボス箱 Thomas 1981: 80-81
カアエムウアセト	<i>h3j-m-w3s.t</i>	-	-	第19王朝	シャブティ (D墓地?) Loat 1904: pl.V, 12
カアイ	<i>kij</i>	-	-	第19王朝?	シャブティ (608号墓) B & E: pl.XLVI
ブタハイイ	<i>pth-lj</i>	-	-	第19-20王朝	シャブティ (D墓地?) Loat 1904: pl.V, 1
フニト	<i>hnj.t</i>	-	-	第19-20王朝	シャブティ (D墓地?) Loat 1904: pl.V, 2
セティ	<i>sh.j</i>	-	-	第19-20王朝	シャブティ (D墓地?) Loat 1904: pl.V, 4
タアミト	<i>t3-mj.t</i>	-	-	第19-20王朝	シャブティ (D墓地?) Loat 1904: pl.V, 6
ブタハバアケド (?)	<i>pth-p3-kd</i>	-	-	新王国時代	シャブティ (453号墓) B & E: 15, pl.XXVII

B & E: Brunton & Engelbach 1927

R-P: Rammant-Peeters 1983

埋葬された可能性があるものの、実際に墓地から出土した称号の例は極めて少ない(表6)。そのうちファイユーム市長ネフェルメヌウ、シェのハaremの代理人イウンエントウレシュ、605号墓の扇持ちが上位グループに含まれている。中でもファイユーム市長とシェのハaremの代理人は、メルウルあるいは「ハarem」の経営に大きな役割を果たしていたと考えられる。オコナーの見解によれば、地方行政に基づ盤を持ち、ときに地位が世襲されていくこうした役人は、中間層とエリート層の間に位置づけられるという(O'Connor 1983: 192)。これはスミスの区分では、準エリート層に相当することになるであろう。トトメスIV世治世下に南のシェの市長であったセベクヘテプが、後に国家財政を担う宝庫長に任命されたという事例(Bryan 1990)は、国家の行政機構内における南のシェの市長が、準エリート層と見なせる位置にあったことを示唆していると言えよう。

従って上位グループの一部では、称号とスミスの区分による社会階層の判定の間に、齟齬が生じる可能性があるということになる。もちろん盗掘が副葬品の組成に影響を与えてることは否定できない。しかしネフェルメヌウの木棺が、購入後に被葬者の名前を入れる既製品であった(Petrie 1890: 38)ことは、グラーブの上位グループを考

える上で注目すべき点である。つまりグラーブの経営の中核にいた人々でさえ、エリート層には及ばないまでも、あらゆる種類の良質な副葬品を準備することができた(Smith 1992: 218)というテーベの準エリート層とは、そもそも資力の上で格差が存在していた可能性が考えられるのである。準エリート層という区分そのものが、その内部でさらに重層的であったと考えるべきであろう。

新王国時代、グラーブは「ハarem」が設置されたことよって王権と密接に結びついた場所であり、またファイユーム地方の生産物が集積される経済的な中心地でもあった。従ってエジプトの国家行政における位置づけは、メンフィスやテーベあるいはアル=アマルナといった中心都市に次ぐものであったと考えられる。想定されるこのような都市間の格差が、同じ中間層あるいは準エリート層に位置づけられる人々の副葬品の格差にも表れていることを、テーベとグラーブの事例が示しているのかもしれない¹⁹⁾。

おわりに

以上、社会経済的差違の抽出を目的として、コーム・マディーナト・グラーブ遺跡の埋葬資料を検討してみた。結果としてグラーブ内での個人間の格差だけでなく、グラ

ブという都市そのものの位置づけについても推測することができた。ここでは最後に、デベンの有効性についてまとめてみたい。

デベン値によって二つのグループが抽出され、それが副葬品の組成によるグルーピングと矛盾しなかったことから判断すると、テーベの資料から知られる物品の価値は、グラーブの埋葬資料においても有効に機能したと考えられる。これはデベンという価値基準が、グラーブにおいても使用されていたことの証明とはならないが、少なくとも物品の相対的な価値が、テーベとグラーブでは大差なかったと考えができるだろう。従って価値基準としてのデベンの汎用性は、ある程度確認されたといえよう。しかし前述したデベンの資料上の問題点は、依然としてその適用に影響を与えている。例えばグラーブでは、副葬品全体に占める木棺の価値の割合が大きく、その設定値によってコストの総計は大きく変動することが明らかであった。ディール・アル=マディーナの彩色木棺の記録は、40デベンから95デベンという大きな幅を持っており、この中のどの程度の値が多様な様相を示す木棺の価値として妥当であるのか、判断を下すのは極めて困難であった。このように価値基準としてのデベンには、今後の研究によってさらに検証していかなければならない問題があり、この方法に過度の期待をかけることは危険である。デベンは墳墓形態や副葬品の組成など、他の検証事項と共に用いることではじめてその有効性が發揮されるといえよう。

本稿は、修士論文の一部を要約、再構成したものである。修士論文作成にあたっては、國學院大學の古山正人教授、大久保桂子教授にご指導を賜った。修士論文執筆に際しては、近畿大学の高宮いづみ講師、早稲田大学の西本真一助教授、ジョンズホプキンス大学大学院の河合望氏に有益なご助言と文献収集のご協力を頂いた。また本稿の作成に際しては、早稲田大学の近藤二郎助教授、河合望氏に多大なるご助言を頂いた。ここに記して感謝いたします。

註

- 1) 本稿で使用する暦年代は、von Beckerath 1997 に準拠している。
- 2) なおメルウル周辺の地域名としてより古くから知られているものに、南のシェ (*š-rsy*: 湖の南の意) がある。
- 3) 第19王朝時代、大周壁内に造営された小神殿においてトトメス3世崇拝が行われていたことも、大周壁の建設が同王に帰せられることを示唆している (Loat 1904: 1-2; Kemp 1978: 130)
- 4) 古代エジプトにおいて「ハレム」(エジプト語で *pr-hnr* あるいは *pt-nswt*) と称される機関は、すでに初期王朝時代に存在が認められる (Reiser 1972: 22)。この機関は、王妃をはじめとする王家の女性と良く結びついて言及されることから、便宜的に「ハレム」の名称で呼ばれている。新王国時代の記録では、グラーブ以外にメンフィスとテーベにも「ハレム」が存在していたことが分かっている。それらの「ハレム」は王宮コンプレックスの一部を占めていたと考えられており、王宮から政治経済的に独立した「ハレム」は、グラーブに特有のものと考えられている (Kemp

1978: 132)。

- 5) メルウルの「ハレム」は、南のシェあるいは単にシェの「ハレム」とも呼ばれていた (Gardiner 1948b: 45-46)。第18王朝初期に比定されているテーベ西岸15号墓の被葬者ティキの父親が、シェのハレムの監督官の称号を帯びており、これが最古の資料である (Davies 1925: pls. III, IV)。また王家の女性と関連する施設がファイユーム地方に存在していたことを示唆する資料は、トトメス4世治世下のファイユーム市長セベクヘテプの墳墓にも認められる (Bryan 1990: 82-84)。
- 6) 墓坑の規模と形態、遺体の性別、頭位、埋葬姿勢、副葬品の内容といった項目立てによってまとめられたリストである。
- 7) simple burial あるいは surface burial などと記述される、砂漠の表層の砂層を浅く掘り下げて遺体を安置した、最も簡易的な墳墓形態である。102基がこのカテゴリーに含まれる。
- 8) シャフト(豊坑)を岩盤レヴェルまで掘削し、その側壁に遺体を安置する空間を設けた墳墓形態で、50基がこのカテゴリーに含まれる。本稿でシャフト墓に一括した墳墓は、さらに二つに細分することができる。一つはプラントンとエンゲルバッハが墓室を *loculus* と記録している形態である。これは遺体を安置するための最小限の掘り込みを穿った、簡素な構造のシャフト墓である。二つめは遺体と副葬品を納めるのに十分な広さを持った墓室を、しばしば複数備えた墳墓形態である。両者を区別して述べる際には、前者を準シャフト墓と記述する。
- 9) 小丘の斜面に水平あるいは下降する溝道を掘削し、その先に墓室を設けた墳墓形態である。プラントンとエンゲルバッハの墳墓リストでは、低位砂漠の突端部に近いQ墓地に位置する20、26、27号墓のみがこれに当たる。Q墓地の3基はいずれもヴォールト天井の墓室を備えており、その壁面は日乾燥瓦の内張りと白色プラスターの塗布が施されるなど、シャフト墓と同等の丁寧な造りである (Brunton and Engelbach 1927: 9-10)。
- 10) シャフト墓に葬祭儀礼を行うための大規模な礼拝堂を付加したもので、岩窟墓と共に新王国時代の私人墓としては最も手の込んだ形態である。シャフト墓にも礼拝を行うための簡素な設備が存在していた可能性は高いが、発見例はほとんどない。平地墓はグラーブの他、サッカーラやアビュドスといった、平坦な地形に形成された墓地で、主に確認されている墳墓形態である (Randall-Maciver and Mace 1902; Martin 1991)。グラーブではW墓地に造営された36、37号墓でのみ礼拝堂が確認されている。
- 11) Thomas 1981: 20-23。ただしトーマスの考察は表面的な試みに過ぎず、その判断基準は必ずしも明確でない。この点をより明確な視点から検証することは、本稿の課題のひとつと言える。
- 12) ヤンセンによれば、ディール・アル=マディーナの記録は、変動パターンを抽出できるような規則性をほとんど持たないという (Janssen 1975: 553)
- 13) 石棺の被葬者は、第19王朝・ラメセス2世の王子ラメセス・ネブウベンと考えられる (Kitchen 1982: 112)。
- 14) カノボス容器に類似した外観を持つ類例は、アビュドスに認められる (D'Auria et al. 1988: 156)。7号墓をはじめとするグラーブのシャブティ容器は、通常の土器を転用している点で、より安価な方法であったと考えられる。
- 15) 草や小枝を束ねた、すぐれ状のマットで遺体をくるむ埋葬方法。グラーブでは広げたマットの上に遺体を安置する例や、遺体の上にマットを被せた例も知られている。
- 16) このような状況には、子供が成人と同様に社会の成員として認識されていた背景が存在していると考えられる (Meskell 1999: 214)。

- 17) ただしピートリが発掘した一連のシャフト墓は大周壁に隣接した場所に位置しており、しかも居住域の生活面を掘り抜いて墓坑が掘削されていると報告されている (Petrie 1890: 38-9; Bell 1985: 64-65)。こうした様相はW墓地やH墓地のシャフト墓とは異なっており、第18王朝時代末期前後に墓地の再編成が行われた可能性を示唆するものといえる。
- 18) オコナーは神官、軍人(士官)、裕福な農民、工人をこの階層に位置づけており (O'Conner 1983: 192)、スミスは王妃ハトシェプストの館の文書管理官ネフェルカウトイや、ゲムバアテンの二つの穀物庫の監督官ハトイアイを準エリート層と見なしている (Smith 1992: 218)。
- 19) ただしこのことは、グラーブにエリート層が全く存在していないことを意味しているのではない。ラメセス2世の王子ラメセス・ネブウベンのように、傍流の王族や一部の高官がこの地に埋葬されたことは十分に考えられる。

参考文献

- Aston,D.A. 1997 Cemetery W at Gurob. In Phillips 1997, 43-66.
- von Beckerath, J. 1997 *Chronologie des pharaonischen Ägypten*. Mainz, Philip von Zabern.
- Bell, M. R. 1985 Gurob Tomb 605 and Mycenaean Chronology. *Mélanges Gamal Eddin Mokhtar I*, 61-86. Cairo, Institut Français d'Archéologie Orientale du Caire.
- Bell, M. R. 1991 *The Tutankhamun Burnt Group from Gurob, Egypt : Bases for the Absolute Chronology of LH III A and B*. Ph.D. Dissertation, University of Pennsylvania.
- Brunton, G. and R. Engelbach 1927 *Gurob*. London, Egypt Exploration Society.
- Bryan, B.M. 1990 The Tombowner and his Family. In E. Dzioebek (ed.), *Das Grab des Sobekhotep : Theben Nr.63*, 81-87. Mainz, Philip von Zabern.
- Chassinat, É. 1901 Une Tombe inviolée de la XVIIIe Dynastie découverte aux environs de Médinet el-Gorab dans le Fayoum. *Bulletin de l'Institut Français d'Archéologie Orientale* 1: 225-234.
- D'Auria, S., P. Lacovara and C.H. Roehrig (eds.) 1988 *Mummies & Magic : The Funerary Arts of Ancient Egypt*. Boston, Museum of Fine Arts, Boston.
- Davies, N. de G. 1925 The Tomb of Tetaky at Thebes (No. 15). *The Journal of Egyptian Archaeology* 11: 10-18.
- Gardiner, A. 1948a *Ramesside Administrative Documents*. London, Oxford University Press.
- Gardiner, A. 1948b *The Wilbour Papyrus, II Commentary*. London, Oxford University Press.
- Gardiner, A. H. and H. I. Bell 1943 The Name of Lake Moeris. *The Journal of Egyptian Archaeology* 29: 37-50.
- Hall, R. 1980 A Pair of Linen Sleeves from Gurob. *Göttinger Miszellen* 40: 29-38.
- Janssen, J.J. 1975 *Commodity Prices from the Ramesside Period*. Leiden, E.J. Brill.
- Kemp, B. J. 1978 The Harim-Palace at Medinet el-Ghurab. *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 105: 122-133.
- Kemp, B. J. 1989 *Ancient Egypt : Anatomy of a Civilization*. London, Routledge.
- Kitchen, K. A. 1982 *Pharaoh Triumphant : The Life and Times of Ramesses II*. Mississauga, Benben Publications.
- Lacovara, P. 1997 Gurab and the New Kingdom 'Harim' Palace. In Phillips 1997, 297-306.
- Loat, L. 1904 *Gurob*. In M.A. Murray (ed.) *Saqqara Mastabas I, 1904, 1905*. London, Histories & Mysteries of Man.
- Martin, G. T. 1991 *The Hidden Tombs of Memphis : New Discoveries from the Time of Tutankhamun and Ramesses the Great*. London, Thams and Hudson.
- Meskell, L. 1999 *Archaeologies of Social Life : Age, Sex, Class et cetera in Ancient Egypt*. Oxford, Blackwell.
- O'Conner, D. 1983 New Kingdom and Third Intermediate Period, 1552-664 BC. In B. G. Trigger, B. J. Kemp, D. O'Conner and A. B. Lloyd (eds.), *Ancient Egypt : A Social History*, 183-278. Cambridge, Cambridge University Press.
- Petrie, W. F. M. 1890 *Kahun, Gurob and Hawara*. London, Kegan Paul, Trench, Trubner, and Co..
- Petrie, W. F. M. 1891 *Illahun, Kahun and Gurob*. London, David Nutt.
- Pillips, J. (ed.) 1997 *Ancient Egypt, the Aegean, and the Near East : Studies in Honour of Martha Rhoads Bell*. San Antonio, Van Siclen Books.
- Rammant-Peeters, A. 1983 *Les Pyramidions Égyptiens du Nouvel Empire*. Leuven, Departement Oriëntalistiek Leuven.
- Randall-Maciver, D. and A. C. Mace 1902 *El Amrah and Abydos*. London, Egypt Exploration Fund.
- Reiser, E. 1972 *Der königliche Harim im alten Ägypten und seine Verwaltung*. Wien, Verlag Notring.
- Richards, J. E. 1992 *Mortuary Variability and Social Differentiation in Middle Kingdom Egypt*. Ph.D. Dissertation, University of Pennsylvania.
- Richards, J. E. 1997 Ancient Egyptian Mortuary Practice and the Study of Socioeconomic Differentiation. In A. B. Knapp (ed.), *Anthropology and Egyptology : A Developing Dialogue*, 33-42. Sheffield, Sheffield Academic Press.
- Seidlmayer, S. J. 1990 *Gräberfelder aus dem Übergang vom Alten zum Mittleren Reich*. Heidelberg, Heidelberger Orientverlag.
- Smith, S. T. 1992 Intact Tombs of the Seventeenth and Eighteenth Dynasties from Thebes and the New Kingdom Burial System. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 48: 193-231.
- Thomas, A. P. 1981 *Gurob : A New Kingdom Town*. Warminster, Aris & Phillips.

和田浩一郎
國學院大學
Koichiro WADA
Kokugakuin University